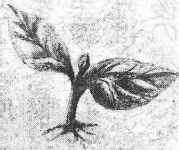
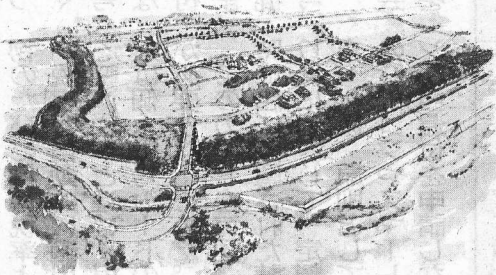


東北復興日記



153



「ここに十二杵の林ができるんです。いわきや首都圏の皆さんにも植樹や森づくりに力を貸していただきたい」津波で自宅や田畑を失った根本賢仁さんから、そんな話をお聞きしたのは昨年春のことでした。

福島県広野町の沿岸では、幅五十呎、総延長約二キロの防災緑地の建設が着々と進んで

認定NPO法人JKSK
女性の活力を社会の活力に
理事長

大和田順子さん



皆で植樹 防災緑地に

います。年度内には造成がほぼ終わり、来年三月から黒マツ、タブ、地域のシンボルであるミカンなどが植栽される予定です。イラスト。

県の富岡土木事務所は造成と並行して主に町民を対象にした「ひろの防災緑地サポーターズクラブ」を設置。これまで七回の会合を重ね、どこにどのような樹木を植えるか、どのように管理していくか話し合いを重ねています。JKSKでは、二〇一三年からいわき市内のNPO法人ザ・ピープルが広野町内に借りている畑で、有機綿栽培の手伝いを続けてきました。年

りを一緒に、というビジョンに共感しているからではないでしょうか。

に三、四回ボランティアバスを運行し、毎回三十〜四十人、高校生、大学生、会社員、公務員、シニアまで幅広い世代のさまざまな職業の方が参加しています。震災から四年半がたった今も参加者が減ることはありません。むしろ、「福島に継続的にかかわっていきたい」と積極的な声が聞こえてきます。

なぜ参加者が減らないのか。それは、広野町の方たちの地域再生への思い、いわきで先行的に取り組んできた市民の情熱、そしてこの防災緑地に植樹をし、木々の成長を見守り、新しいふるさとづく

ボランティアバスでは畑で汗を流した後、地元の方たちと意見交換を重ねてきました。そして今年には復興庁「新しい東北先導モデル事業」を活用し、広野町に賑わい・なりわいをつくり出す「広野わいわいプロジェクト」に取り組んでいます。明日十二日も綿畑で汗を流し、午後は地元のお米、綿、みかんなどを生かした商品開発ワークショップを行います。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。